みもすそ

伊勢神宮崇敬会だより

特集
古市街道を歩く

お伊勢さんの歳時記

8月4日　風日祈祭
9月上旬　抜穂祭
17日　大麻暦頒布始祭
21～23日　秋の神楽祭
22日　秋季皇霊祭遥拝
30日　大祓
10月1日　神御衣奉織始祭
1日　御酒殿祭
1日　神宮観月会
5日　御塩殿祭
13日　神御衣奉織鎮謝祭
14日　神御衣祭

内宮を流れる五十鈴川は、倭姫命が御裳を濯がれたことから「御裳濯川」（みもすそがわ）とも雅称されます。題字は本会会長の松下正幸による浄書。表紙は、旧街道の面影を今に伝える麻吉旅館。

第95号
令和2年　夏

外宮と内宮を最短距離で結んだ古市街道。
かつては遊郭や芝居小屋が軒を並べていました。
空襲によって町の大半を焼失しましたが
老舗宿や史跡が往時の面影を伝えています。
間の山を越えて歩き参宮してみませんか。

特集 古市街道を歩く

切妻、妻入で杉板刻み囲いの伊勢らしい古民家が店舗に。

江戸時代、「一生に一度でも」と庶民が夢見た伊勢参り。東海道から分岐した伊勢街道（参宮街道）の最終地、外宮と内宮を最短距離で結んでいたのが古市街道（通称）です。

総距離は約四・五キロ。「間の山」とよばれる小山の尾根に沿って延びる街道には、かつて妓楼七十軒あまり、遊女千人超を数える花街があり、吉原や島原に並ぶ賑わいをみせていました。しかし明治の改革や昭和の空襲によって建物の大半が焼失。町並みはすっかり現代風になりましたが、唯一残る老舗旅館や、社寺、史跡を示す石碑が往時をしのばせます。

小田橋の日陰で憩うコイ。

伊勢音頭恋寝刃の舞台

古市街道の出発地点は、勢田川に架かる小田橋。古くから神宮の神饌がここを通って運ばれたことが文書に残され、御遷宮用材もこの橋詰に着けられたことから、今も内宮領のお白石持（陸曳）の出発地になっています。欄干に擬宝珠が並ぶ橋の下には、日陰を求めてコイが群れていました。

小田橋を渡ると、古市までは登り坂となります。坂道の途中、民家の前に「お杉お玉」の石碑が建っています。江戸時代、沿道で多くの女性芸人が唄や三味線を披露する中、客からの投銭をバチで交わす芸で評判を呼んだ、お杉お玉の活躍を示した碑です。

坂を上りきる辺りからが昔の古市（現倭町、古市町、中之町、桜木町）です。近世以前は人家の少ないエリアでしたが、天明～寛政（一七八一～一八〇一）頃から大勢の参宮者が訪れ賑わうように。

古市三座とよばれる芝居小屋が建ち、歌舞伎役者にとっては江戸・上方進出の足がかりとなる登竜門ともなりました。「古市芝居跡」の碑は、三座のひとつ長盛座があったところです。

近鉄の跨線橋の手前、街道を右手の路地に入った先にあるのが大林寺。有名な歌舞伎狂言「伊勢音頭恋寝刃」の元になった刀傷沙汰の主人公・遊女お紺と孫福斎の比翼塚がひっそりと建っています。

「事件があった妓楼油屋と大林寺は、昔は地続きだったんです。昭和四〇年代に近鉄線を通すため、切り開かれて尾根が分断されてしまいました」

境内で庭木の手入れをしていた住職が教えてくれました。街道に戻ると、ここから先は平坦な尾根道となります。

懸崖造の老舗旅館

跨線橋を渡ったすぐ左手にあるのは、芸能の神アメノウズメノミコトを主祭神

古市街道の起点、小田橋。古くから勢田川に架かっていた橋で、江戸時代以降の多くの文書にその名が記されている。

寛永2(1625)年開基と伝わる大林寺。遊里古市の盛衰をみてきた寺で、境内に遊女お紺と孫福斎の眠る比翼塚がある。

古市の中心部にある長峯神社。天岩戸の前で舞ったとされるアメノウズメノミコトを主祭神とすることから芸能の神として信仰があつい。

として祀る長峯神社。かつての芝居の里とあって、名古屋や大阪へ公演に来る役者も、伊勢参宮とあわせてお参りされるそうです。常駐する神職はみえないようで、社務所には朱印を求める人のために連絡先の電話番号が記されていました。

左手の路地に入ると、創業二百年余の料理旅館「麻吉」があります。傾斜地を這うように段々と下っていく懸崖造の棟は五層六階にも。道をまたぐ渡り廊下、べんがら色の板戸、屋号入りの瓦…遊里の情緒をしっとりとたたえ、おかげ参りの時代にタイムスリップしたかのよう。

「はっきりした創業年はわからないのですが、一七八二年の街並図に麻吉の名が記されています。この古いおくどさん（かまど）は、棟の中心地にあり、二十年前までは湯を沸かすなどして使ってい

急斜面に沿って建つ旅館「麻吉」。かつては茶屋だった。井戸とへっついのある旧厨房と、女将の上田聖子さん。

古市の旅館で披露されていた伊勢音頭は、芸妓たちの顔見せの場でもあった。（伊勢古市参宮街道資料館展示より）

遊女お紺と斎の悲恋を伝える大林寺の比翼塚。戯曲「伊勢音頭恋寝刃」に描かれ人気を博した。

「伊勢音頭恋寝刃」大正時代の台本。（伊勢古市参宮街道資料館蔵）。

郵便局の手前にある古市芝居跡碑。かつてここに長盛座があった。

まつり博がきっかけで平成６年に復活 地元ゆかりの「伊勢音頭恋寝刃」公演も

伊勢古市歌舞伎保存会

江戸時代、古市に3カ所あった芝居小屋。最後まで残っていた「長盛座」が戦火で失われてからも、昭和38年までは地元の若者たちが毎年公演を行ってきましたが、高度経済成長にともない伝統の灯は途切れてしまいました。

地歌舞伎を復活させるきっかけとなったのが、平成6年の「まつり博・三重」です。かつての演者たちが舞台出演したのを機に、「伊勢古市歌舞伎保存会」が設立されました。現在は、3代目会長・中野眞家さんのもと、中学生から60代まで25名の会員を数えます。演目はいくつかありますが、大きな会場から声がかかった際には、地元ゆかりの「伊勢音頭恋寝刃」を熱演します。

毎週土曜に古市公民館に集まって稽古し、例年は秋の伊勢まつり、河崎商人市、春の二見おひなさまめぐりなどで披露されますが、今年は新型コロナウイルスの影響で、春先に伊勢の山田奉行所記念館で「白波五人男」を演じて以来活動を休止中。「舞台を作り上げるには役者のほか、裏方やお囃子の地方（じかた）など多くの人手が必要。地元以外の方でも結構なので、興味を持たれる方の入会をお待ちしています」と中野さん。

一日も早く古市歌舞伎の幕が開き、伝統が未来へ受け継がれていくことを願っています。

上／今春、山田奉行所記念館で公演された「白波五人男」。
右／長盛座と染め抜かれたハッピを着る〝中村眞二郎〟こと3代目会長の中野さん。大林寺にて。

麻吉最上階の聚遠楼。朝熊山や二見が遠望できる。

たんですよ」と女将の上田聖子さん。明治時代は三十人もの芸妓を抱える県下一の大料理店だったとか。最上階の大広間「聚遠楼」にお邪魔させていただくと、窓の向こうに朝熊山の遠望が広がっています。ここで夜ごと伊勢音頭が賑やかに踊られていたのでしょう。

「古い建物の維持管理は大変で、毎年台風の時期は怯えてばかり」と嘆息されますが、歴史好きなら一度は泊まってみたい佇まいです。

古市の歴史を伝える参宮街道資料館

寂照寺は、徳川家康の孫で秀忠の娘・千姫の菩提を弔うために建立された寺。地元では、豊かな画才で寺の危機を救った中興の祖・月僊上人の寺として知られています。

伊勢自動車道との立体交差手前にあるのが伊勢古市参宮街道資料館。世古富保館長は現代美術の作家でもあり、年二回の企画展ではその手腕を発揮します。

「江戸時代に起こった熱狂的なおかげ参りでは、日本人の六人に一人が伊勢を訪れました。備前屋・杉本屋・油屋の三大妓楼をはじめ、明治から昭和まであった名旅館の数々…ぜひ古市の歴史に触れていってください」

伊勢参りへ行く際、持っていると飯や水が無料で施された〝通行手形〟代わりの柄杓。伊勢の御師が檀家から回収してきた御札を納めた御祓箱。牛車の車輪を家紋とした備前屋の重箱、伊勢音頭の図、遊女直筆の手紙…館内にぎっしりと古市の歴史が詰まっています。

古市妓楼などの関係資料を解説する伊勢古市参宮街道資料館の世古館長。入館無料、月曜休館。TEL.0596-22-8410

妓楼で使われていた什器と、館内の展示。

高架の側道を下っていくと、「出世地蔵」として信仰を集める桜木地蔵が。大岡越前守忠相が山田奉行だった頃にお参りし、のちに江戸南町奉行に抜擢されたことから、出世や昇進にご利益ありと敬われるように。神宮奉納相撲の折に参拝する力士も少なくありません。

再び古市街道に戻り、牛谷坂とよばれる下りにさしかかったところに、一対の両宮常夜燈が建っています。まちがいなく伊勢街道一の大きさ。緑陰でのひと休みにぴったりの場所です。

牛谷坂を下ったら、みちひらきの神で知られる猿田彦神社。おはらい町を抜けたら宇治橋前に到着です。伊勢参りは、両宮参拝が正式な作法。外宮にお参りしてから古の旅人が辿った旧街道を歩き、内宮へ参拝されてはいかがでしょう。

上／地元の方々にも信仰があつい桜木地蔵。
左／牛谷坂の手前に建つ伊勢街道最大の両宮常夜燈。